オペライズモからアウトノミアへ イタリアにおける賃金要求への動き

伊藤公雄(京都大学)

はじめに

報告の個人的な背景

- フィールドとしてのイタリア
- なぜイタリアだったのか?

全体主義への恐怖

なぜ人々が全体主義を支持したのか?

鏡としてのイタリア

• イタリアと日本 相違性/相似性

近代産業社会(国民国家形成)の第二波組 日独伊(1860~70年前後に国家統一= 近代国民国家へ)

20世紀後半 ファシズム国家へ

イタリアは敗戦国か?

イタリアは「敗戦国」ではない1943年 ムッソリーニの首相解任

3重権力状態

イタリア王国、イタリア社会共和国 パルチザンの解放区

1945年 連合国の支援のもとムッソリーニのイタリア社会共和国(サロ政府)からイタリア 解放

戦後社会における日伊

• イタリア 君主制廃止 戦争放棄の憲法

- ・他方で、東側諸国との対立(ユーゴとの最前線地帯)のため米軍基地の存続
- 西側最大の共産党 アメリカの影
- クーデタの危機 1970年前後の緊張の戦略

イタリアにおけるマルクス主義

• 第一次世界大戦とイタリア社会党 第二インター系社民党のなかで唯一反戦 戦後は社会党としてコミンテルン加盟 後に共産党の成立で排除 戦後の革命的情勢とファシズム 1922年 ムッソリーニらのローマ進軍 1925年以後 全体主義化

ムッソリーニと王



戦後イタリアのマルクス主義

・ 強力な共産党 労働組合から余暇組織まで トリアッティと構造改革派(民主主義の徹底 のなかでの社会主義への道を展望)

- 社会党内部のマルクス主義潮流(新左翼的 党派もここから生まれる)
- 社共以外の知識人左翼

トリアッティ書記長



オペライズモ

1960年代 オペライズモ(労働者主義)の登場 背景 スターリン主義批判、ハンガリー事件 新しい左派の雑誌運動 『赤い手帳』1961、『労働者階級』1964

社会党左派のRaniero Panzieri(手帳の創始者の一人)が労働者の実態調査の中から生み出した言葉:労働者の生活に根ざした労働者の側からの計画的かつ積極的社会変革戦略(待機主義ではなく主導性)

オペライズモ(続)

- マリオ・トロンティ、アントニオ・ネグリらの概念 の発展
- 労働者階級こそが資本主義発展のモーター
- ・ 逆にいえば、労働者階級は、積極的に社会 に亀裂を生み出し、変革することが可能

単に資本の支配に反発する(賃金闘争や条件闘争)のではなく、労働者の側から政治経済構造を変えていく闘争を!

トロンティとネグリ

• 1960年代後半

オペライスト右派としてのトロンティは共産党 へ合流

左派のネグリら 党派 「労働者の権力」結成

1967年の学生運動 学生=労働者階級内部に属する社会的存在(ピサ・サピエンツアのテーゼ)

学生運動の一定の勝利 入試廃止など

学生運動



熱い秋

- 1969年「熱い秋」 労働者の運動の爆発
- 1970年 労働憲章の成立労働者階級の「勝利」

スカラ・モービレ(物価対応賃金制度)、個人都合の有給休業の拡大、低学歴層の150時間コース制度など(学生・知識人活動家と労働者大衆の出会い=相互の学びの場に)

熱い秋 1969



1970年代の混乱

- 1969年 緊張の戦略の展開 グラディオ
- 対抗した左翼の武装闘争の展開(赤い旅団 へ)
- 共産党の躍進とチリクーデタ(1973年)歴史的妥協路線へ
- 主要新左翼諸グループの「解党」 ネグリら アウトノミア運動へ(1973年)

アウトノミア運動

- アウトノミア(自立/自律)
- 資本主義からの自立中央集権的な組織の解体

国家、労働組合、政党からの自立した、自発的自己組織的な労働者の運動へ

労働者の運動形態としての「労働の拒否」

欠勤主義、ゆっくりした仕事の推進、労働現場の自主的組織化など

資本主義批判

アウトノミアの社会認識 全世界化/全社会化した資本の支配 すべての人が資本の生産と利潤追求の下 で搾取される「労働者」=社会的労働者 專業主婦、学生、失業者•••• 社会的賃金の要求(BIのひとつの形態) 「家事労働に賃金を」「学生に賃金を」「失業 者に賃金を!・・・

転機としての1977年

- 1970年代イタリア 長期の不況のなかで、労働運動、学生運動の継続
- 解放的な文化運動/武装闘争の二重化
- ・1977年の運動 弾圧と武装グループの地下での非合法闘争への動き

「鉛の時代」としての70年代後半から80年代初 1978年モロ元首相の誘拐殺人事件

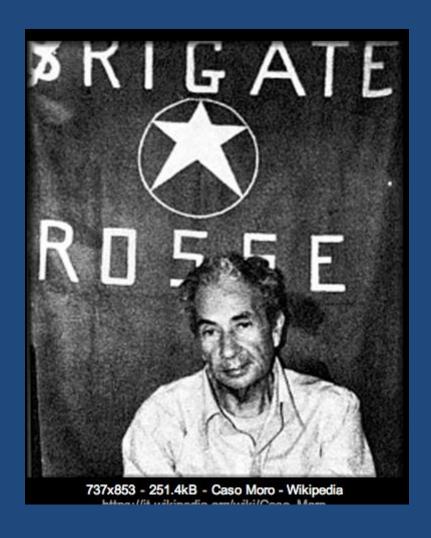




メトロポリタンのインディアンたち



七口事件 1978



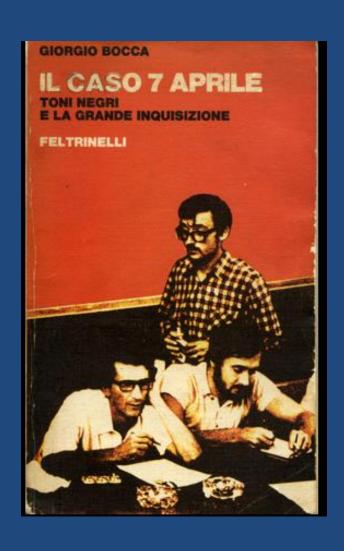
死体で発見されたモロ元首相



ネグリのその後

- 1979年4月7日事件 活動家一斉逮捕
- 1983年の総選挙に急進党から獄中立候補当 選 不逮捕特権のままパリへ亡命
- 帰国/逮捕 自宅軟禁から外での活動再開
- ・新たな理論構築『帝国』論 マルチチュード 認知資本主義の時代(情報や知識 朝から晩まであらゆる生活が搾取の対象 ベーシック・インカムは重要な社会変革の武器

4月7日事件 3000人以上の逮捕



4月7日事件の逮捕者たち



社会センター

- ・ イタリアにおける集団的生活防衛/文化創造 と共生の空間
- 1970年前後の学生運動の経験 ミラノ大学建築学科 占拠中の大学をホームレスの人たちの居住の場所に
- アウトノミアから社会センター centro socialeの 運動へ 1970年代半ばの「自立空間」「自由 空間」の拡大の運動の流れのなかで

イタリアにおける社会センター

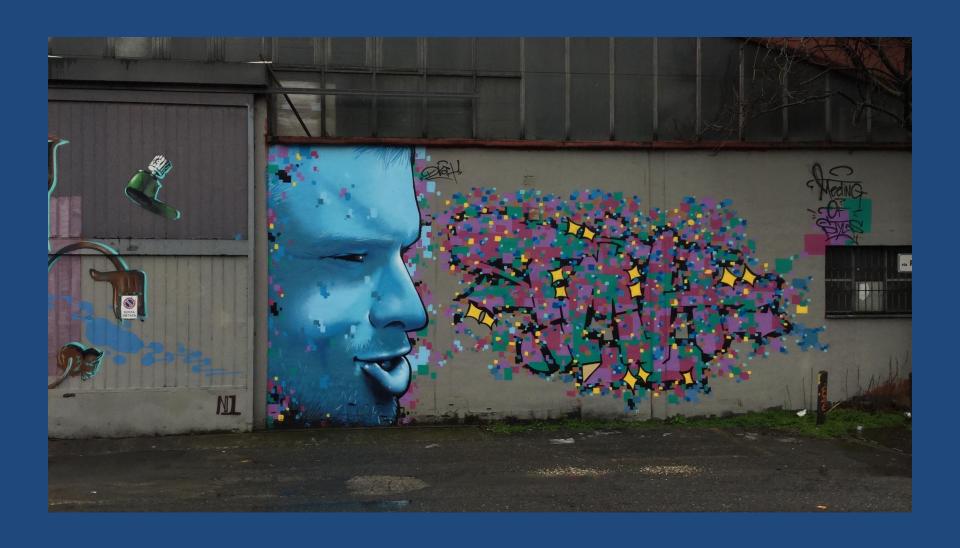
イタリアにおける社会センター運動

1970年代から広がる(全国に100カ所以上存続)

空き家や空き工場を占拠

当初は政治的活動が主だったが、1980年 代以後は、若者文化の文化創造、享受の場 として自主管理

リマ フロ(ミラノ郊外)







プリモ・モローニ(カルスカ)





資料館の運営



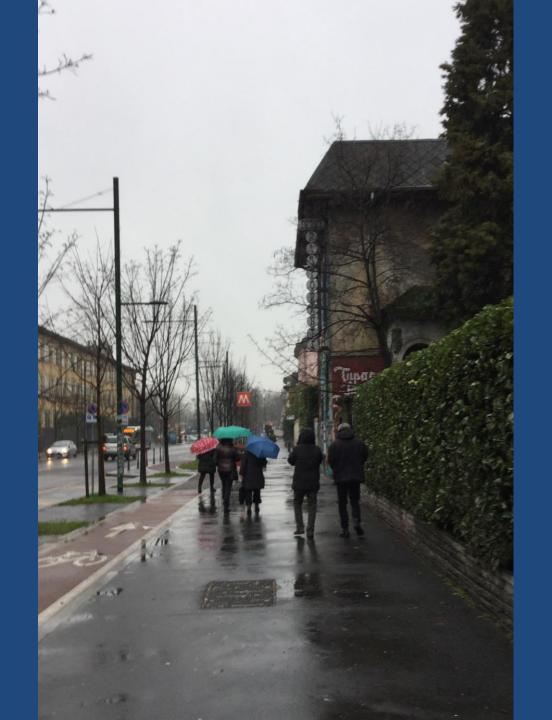




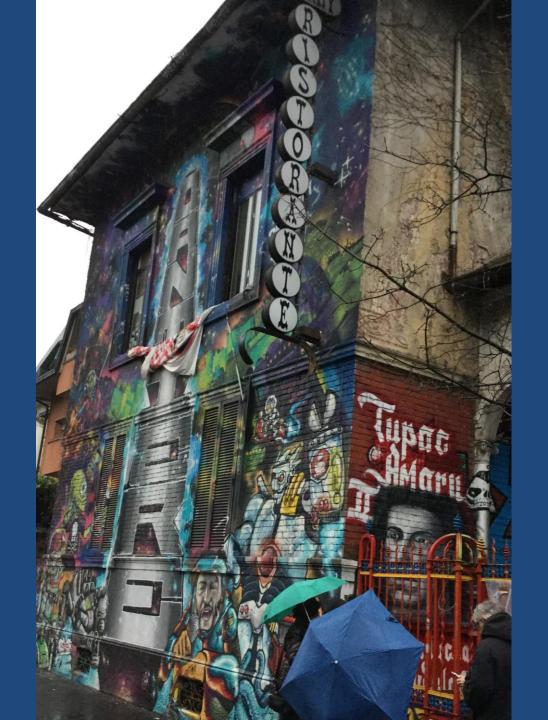
カンティエーレ

- ミラノでも規模の大きい社会センター
- 旧キャバレーを占拠して運営

本屋、食堂からコンサート会場まで



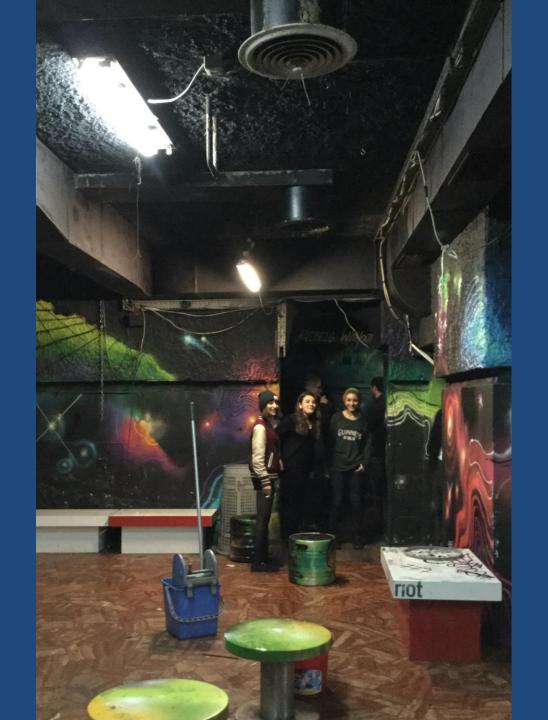












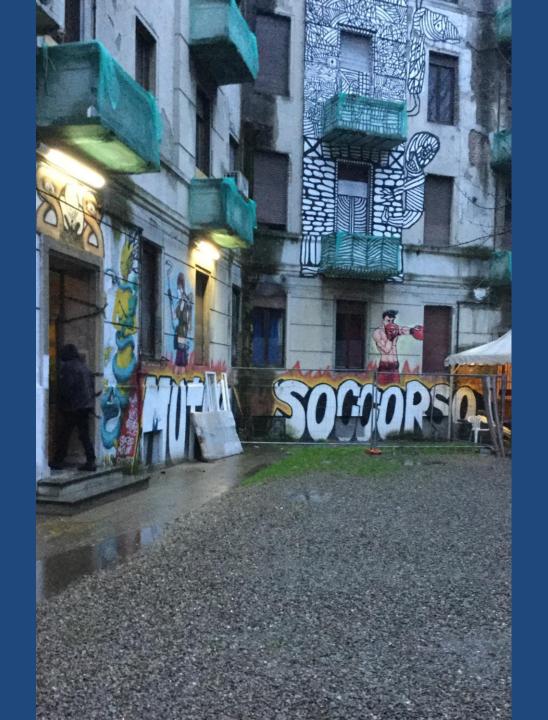




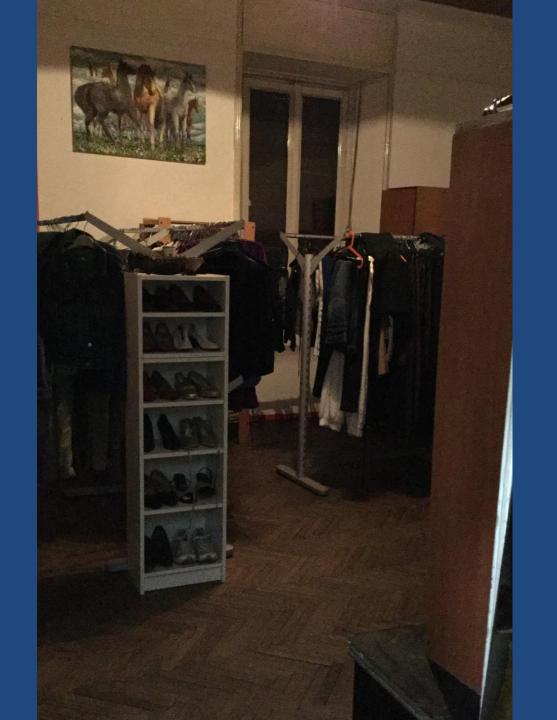
自分たちの共同住宅建設

カンティエーレに近接するアパート

・ 貧困者支援のための居住空間と文化活動支援

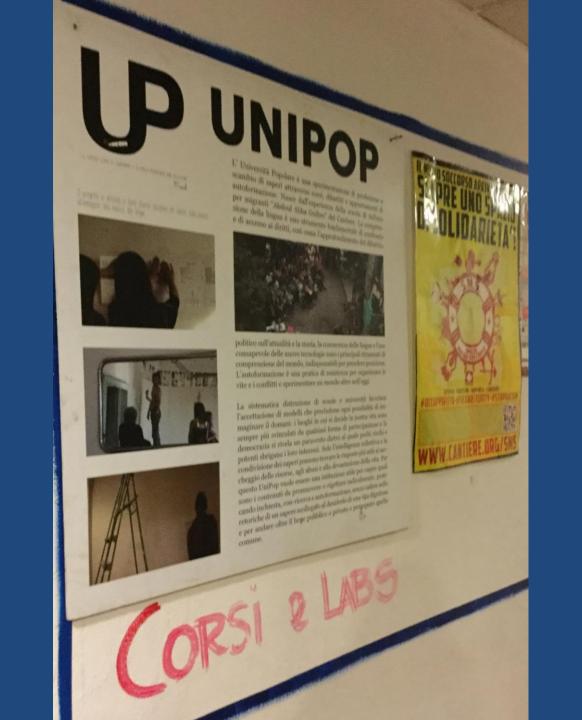








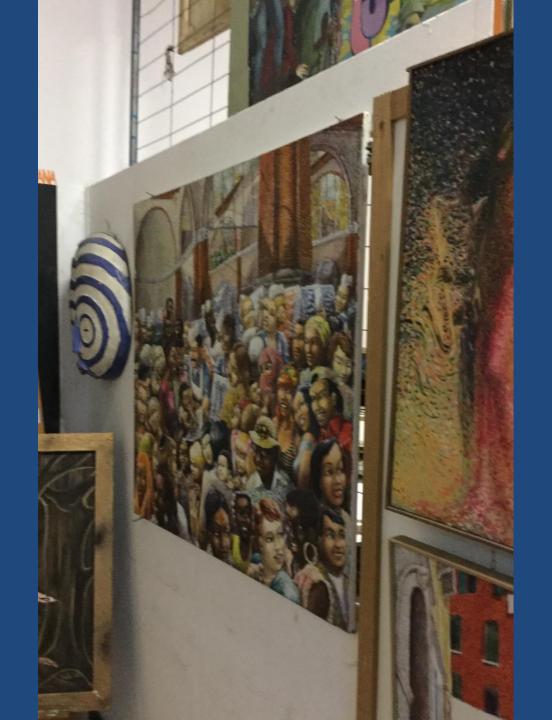


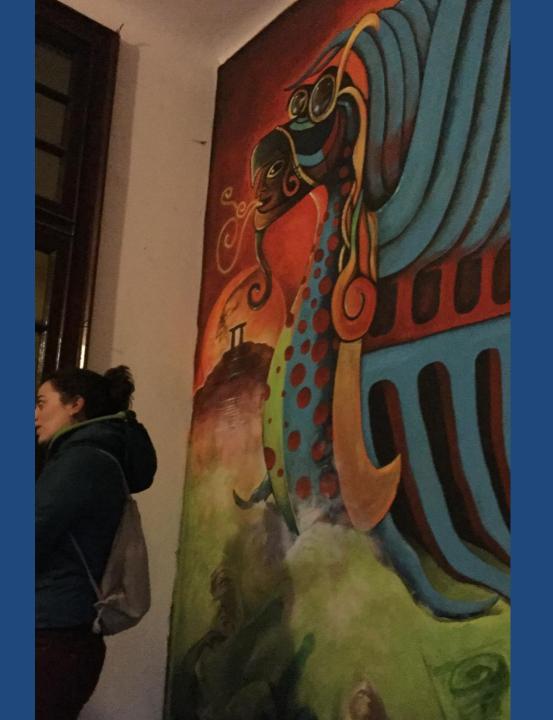














マカオ アート活動中心









グローバル化と新「自由主義」

グローバル化と新自由主義のなかで

国家=「国民」の社会保障の削減/格差拡大放置の一方で、グローバル資本には手厚い保護(市場中心主義ではない!)

レント資本主義 レント=元々は地代などの 不労所得/現在は金融資本主義の非生産 的で寄生的な収入拡大の動き

もうひとつの世界へ

- 経済危機のなかのギリシア、スペイン、イタリア 物物交換も含む、市場から一定距離をとった経済圏・生活圏の浮上(社会センターはその一例)/資本主義市場とのゆるいつながりの維持
- 社会的連帯経済 連帯経済/社会的経済(共同組合運動)の動きも 韓国やLA
- ベーシック・インカムによる生活と社会の安定 もひとつの重要なオルタナティヴ

トービン税と国際社会

・トービン税(国際金融取引への課税)と不安定社会への国際的支援の可能性

誰が集めて、どのような基準で配分するのか。

近代資本主義の曲がり角で

- 近代産業社会=近代資本主義の行き止まり
- 環境の破壊という重要課題(増殖のみを求めて環境の負荷や人間の尊厳を無視して進行してきた資本の論理がもたらしたもの)
- オルタナティヴを求めて

縮小社会の実現のためには、資本主義批 判が重要な課題のひとつになる